

王績「古意」六首考

著者	加藤 文彬
雑誌名	中国文化：研究と教育
巻	71
ページ	57-69
発行年	2013
URL	http://doi.org/10.15068/00150991

王績「古意」六首考

加藤 文彬

はじめに

初唐の王績は、主に陶淵明にあやかっけて詩文を制作したとされているが、王績の詩文に対する評価は、王績詩は淵明詩には及ばない、というものが多数を占めている。例えば詹鐸氏^①は「咀爲他過的是比較富裕的生活、對於現實的態度是消極的成分居多、缺乏陶詩積極的理想和熱情。所謂成就不高（彼は比較的裕福な生活を送ったので、現実に対する態度には消極的部分が多く、淵明詩のような理想や熱情に欠けるところがある。それゆえ彼の詩文の成果は高いものではない）」と述べている。確かに王績の境遇は淵明のそれとは異なり「奴婢數人、足以應役（奴婢數人にして、以て役に應ずるに足る）」とあるような、一定の裕福さの中にあった。しかし、彼が裕福であるが故に現実に対する理想がない、あるいはそのために彼の詩文が淵明ほどの切

実さを有していないとみるならば、それは早急な見解であろう。実際に王績の詩中には「明經思侍詔、學劍覓封侯^③（經を明らかにして侍詔を思い、劍を學びて封侯を覓む）」とあるように、彼の眼前にある現実、すなわち官僚世界に対する視座が確かに存在している。本稿は王績のそのような現実に対する認識を起点として、隱遁者としての自己——対社会的な自己——が獲得されていく過程を「古意」六首の連作構造のうちに見出そうとするものである。^④

一

王績「古意」六首を解釈する上で、まずは詩題の「古意」について触れなくてはならない。^⑤「古意」と題された詩はすでに劉宋期から見られ、『文選』にも徐悱「古意酬到長史朱登琅邪城詩」、范雲「古意贈王中書」等の詩が採られている。徐悱詩の題下注で呂向は「古意作古詩之意也（古

意は古詩の意を作すなり」とする様に、「古意」とは古詩の意図をその詩的世界にあらためて示す営みのことである。康金聲・夏連保氏『王績集編年校注』（山西人民出版社、一九九二。以下『編年校注』と略す）も詩題の「古意」を「内容較為廣泛、率多託古喻今之作（内容はいささか広汎であつて、その大部分は古に託して今現在を喩えるものである）」とする。ただし王績「古意」詩の「古」が具体的は何を指しているのか、そして「古」に対して彼がどのような視座を有していたかは明確にされてはいない。

「古意」其一是「幽人在何所（幽人何れの所にか在らん）」と詠い始めるのであるが、そもそも「古意」を詠じる際に何故「幽人」の語から詠出する必要があつたのか。そこで本節では「幽人」が如何なる特質を持つものであるのか、そしてそれが其一に於いてどのように表現されているのかという二点を中心に考察する。

幽人在何所 幽人 何れの所にか在らん
紫巖有仙躅 紫巖 仙躅有り
月下横寶琴 月下に寶琴を横たう
此外將安欲 此の外に將安れをか欲せん
05 材抽嶧山幹 材は嶧山の幹を抽き

微點崑丘玉	微は崑丘の玉を點す
漆抱蛟龍唇	漆は蛟龍の唇を抱き
絲纏鳳凰足	絲は鳳凰の足を纏う
前彈廣陵罷	前に廣陵を弾きて罷め
10 後以明光續	後に明光を以て續ぐ
百金買一聲	百金 一聲を買い
千金傳一曲	千金 一曲を傳う
世無鍾子期	世に鍾子期無くして
誰知心所屬	誰か知らん心の屬する所を

〈「古意」其二〉

第一句「幽人」については今場正美氏が指摘する様に、王績自身の仮託として捉えることが可能である。⁽⁶⁾ただし、王績の語る自己はよりいっそう複雑性を帯びている。⁽⁷⁾そもそも「幽人」の語は『易經』に基づく語であり、六朝期に於いては隱遁者の理想像として詠じられるものであった。⁽⁸⁾「古意」其二初句の発問「幽人在何所」に対しては、「紫巖有仙躅」として、幽人の痕跡を述べることでその存在が示唆されている。ではその様な「幽人」を「幽人」たらしめるものは何か。それは第三句に詠出される「寶琴」である。「寶琴」は嶧山の幹を材とし、琴節に崑崙の玉を

用いてきらびやかに装飾されており、廣陵散、楚明光という琴曲の演奏に用いられる。廣陵散は嵇康が処刑の寸前に弾いたとされる曲であり、楚明光も同じく嵇康の弾いたとされる琴曲である。ここに於いて、廣陵散・楚明光を弾く「幽人」の姿は「古」の嵇康のイメージと重ね合わされて、すなわち嵇康を媒介とした自己の仮託として詠じられているのである。また終聯に於いて「世無鍾子期」と鍾子期の様な知音の不在、すなわち「心所屬」という内に秘められた感懐が誰にも理解されないことへの歎きが提示される。この「心所屬」は、嵇康のイメージを媒介とした「幽人」の感懐であり、それこそが「古意」六首の主題である。この感懐はどのような内実をもって其二以下の詩群で詠出されていくのであろうか。

二

王績は隋の煬帝の大業中に揚州六合縣丞の職を辞している^①。恐らくは前年に、煬帝の高句麗遠征に対抗して楊玄感が挙兵し、後に各地で反乱が起こったことに起因するものであるろう。『編年校注』が本詩の製作年を大業十(六一四)年と指摘するように、「古意」六首にはそのような状況にあつて離職し、隠遁せねばならぬ境遇に対する感懐が表現

されている。そしてそのような感懐を連作によって示さんとした時、そこにはある一貫したテーマが自ずと立ち現れてくる。一貫するテーマについて、今場正美氏は「運命に對する懷疑」と位置づけ、其二以下で詠われる「竹」「寶龜」「松」「桂樹」がそれぞれ王績の分身であり、「何者かによつて切られる」という被害者意識がイメージされるとする。確かに其二から其五には斧や刀が繰り返し詠出されている。

01 竹生大夏溪

竹は大夏の溪に生じ

蒼蒼富奇質

蒼蒼として奇質に富む

：

刀斧俄見尋

刀斧 俄かに尋ねられ

10 根株坐相失

根株 そぞろ 坐に相い失う

裁爲十二管

裁たれて十二の管と爲り

吹作雄雌律

吹かれて雄雌の律を作す

〈古意〉其二

01 寶龜尺二寸

寶龜 尺二寸

由來宅深水

由來 深水中に宅す

：

漁人遞往還 漁人 遞いに往還し

10 網罟相繁囿 網罟 相い繁囿す

一朝失運會 一朝にして運の會するを失い

剗腸血流死 剗腸せられ 血流れて死す

〈「古意」其三〉

01 松生北巖下 松 北巖の下に生じ

由來人徑絶 由來 人徑絶ゆ

07 何時畏斤斧 何れの時にか 斤斧を畏れん

幾度經霜雪 幾度か霜雪を経たり

〈「古意」其四〉

01 桂樹何蒼蒼 桂樹 何ぞ蒼蒼たる

秋來花更芳 秋來りて 花更に芳し

：

13 榮蔭誠不厚 榮蔭 誠に厚からず

斤斧亦勿傷 斤斧も亦た傷なう勿し

〈「古意」其五〉

其二、其三では「竹」「寶龜」が断たれ、「竹」は笛とな

り、「寶龜」は卜占の道具として用いられる。その一方で其四、其五では「松」も「桂樹」も、「斤斧」によつて断たれることはない。この相違については其二で語り手の態度が示されている。其二は「竹」について詠うものであり、この「竹」は「大夏」の溪谷に生え、その葉や茎は青々と繁茂し、第六句に「鵲鸞食其實（鵲鸞其の實を食らう）」とあるように、俗世から断絶されたイメージをもつて詠じられている。だがそのような竹は第九句に於いて「刀斧」によつて断たれてしまう。そもそも「大夏」に生じた竹は何故断たれるのか。それについて王績は以下の様に述べる。

有用雖自傷 有用 自ら傷うと雖も

無心復招疾 無心 復た疾を招く

15 不如山上草 如かず 山上の草の

離離保終吉 離離として終吉を保つに

〈「古意」其二〉

ここである「有用」は、律を作すという笛としての「有用」であつて、「竹」は「有用」であるが故に、第七・八句に於いて「寧知軒轅後、更有伶倫出（寧ぞ知らん軒轅の後に、更に伶倫の出づる有るを）」と詠われるように、大

夏までやってきた伶倫によって伐られてしまう。社会から離れた場所に自生していた「竹」は、社会的に「有用」であるために社会という構造に組み込まれていくのである。

また、其三では「寶龜」が「網罟」に捕らえられ、「刳腸血流死」する存在として詠出されている。「寶龜」は卜占の道具として「有用」であるが故に断たれるのである。⁽¹²⁾「有用」なるものが断たれるということは「莊子」等に散見されることではあるのだが、王績は次句で「無心復招疾」と

「無心」であっても「疾を招く」とし、否定的に捉えている。この「無心」はどのような内実を持つのであろうか。「無心」の語は『莊子』に基づくものである。竹を「無心」とする先行例には、庾信「邛竹杖賦」の「沉冥子遊於巴山之岑、取竹於北陰。洪娟高節、寂歷無心」(沉冥子巴山の岑に遊び、竹を北陰に取る。洪娟として高節、寂歷として無心)がある。「邛竹杖賦」に於ける「無心」は中が空洞であるという竹の性質を示しているに過ぎないのであるが、「古意」其二に於いては「有用」の対立概念として解釈せねばならない。すなわち、其一で嵇康を想起させた語り手は、其二に於いてもそのイメージを継続して用い詠出しているのである。実際に嵇康は「家誠」に於いて「人無志、非人也。但君子用心所欲準行。自當量其善者、必擬議而後

動。……若夫申胥之長吟、夷齊之全潔、展季之執信、蘇武之守節、可謂固矣。故以無心守之、安而體之、若自然也、乃是守志之盛者可耳(人志無くんば、人に非ざるなり。但だ君子のみ心を準行せんと欲する所に用う。自ら當に其の善なる者を量り、必ず擬議して後動くべし。……夫の申胥の長吟、夷齊の全潔、展季の執信、蘇武の守節の若きは、固しと謂うべきなり。故に無心を以て之を守り、安じて之を體し、自ずから然るが若きは、乃ち是れ志を守るの盛んなる者可なるのみ)」と述べ、「無心」を以て自己の志を守るということが重要であるとしている。ここには嵇康の社会に対する態度が表明されており、「古意」其二の「無心復招疾」には、「無心」を保ち志を守って社会と対峙しつづけた嵇康のイメージが反映されているのである。

ただ、「竹」のもつ「有用」「無心」という両側面は、どちらも社会と関係を築いているという点に於いては同列である。すなわち社会的榮達としての「有用」、反社会的態度のあらわれとしての「無心」のいずれも、社会という前提の上にあるものであつて、王績はそれらを「自傷」「招疾」として、あくまで否定的に捉えている。そしてそのような「有用」「無心」の地平を超えたものとして終聯の「山上草」が示されるのである。「山上草」はあらかじめ社会

から切り離された存在であって、王績は自己の隠遁の理想を、そのような孤絶した境涯に設定しているのである。

そのような「山上草」の境涯をより具体的に示しているのが其四の「松」である。

01 松生北巖下 松 北巖の下に生じ

由來人徑絶 由來 人徑絶ゆ

：

何時畏斤斧 何れの時にか 斤斧を畏れん

幾度經霜雪 幾度か霜雪を経たり

風驚西北枝 風は西北の枝を驚かせ

10 電損東南節 電は東南の節を損なう

不知歲月久 知らず歲月の久しきを

稍覺條枝折 稍く覺ゆ 條枝の折れたるを

〈「古意」其四〉

「北巖」の下に生じた「松」は「由來人徑絶」というあらかじめ社会から切り離された場所に存在しており、その点に於いて社会との関わりをもつ「有用」「無心」の次元とは異なるものとして詠出されている。つまり「松」は、社会的次元を空間的に超えているのであって、第七句「何

時畏斤斧」はそのことを明確に指し示している。また第三句以降、「藤蘿上下碎、枝幹縱横裂。行當糜爛盡、坐共灰塵滅（藤蘿上下に碎け、枝幹縱横に裂く。行くゆく當に糜爛して盡くべく、坐して灰塵と共に滅びん）」と詠い、何年も経てようやく枝や幹が朽ち果てていく様が詠われる。空間的に断絶された「松」は、歲月の流れによって朽廃していき、むしろそうなることによって社会的次元に時間的に超克するのである。そのような境涯は第十七・十八句に於いて「寧關匠石顧、豈爲王孫折（寧ろ匠石の顧に關らわん、豈に王孫の折るところと爲らん）」と詠うことによって確認されていく。「松」は、社会的次元を空間・時間的に超えることによって「有用」「無心」の次元にある「匠石顧」から完全に切り離されるのである。すなわち其四に詠われる「松」は、其二で設定した、「不如山上草、離離保終吉」という自己の隠遁の理想を具体的に示しているのである。

其五でも「斤斧」に切られることのない「桂樹」が詠われる。

01 桂樹何蒼蒼 桂樹 何ぞ蒼蒼たる

秋來花更芳 秋來りて 花更に芳し

自言歲寒性 自ら言う 歲寒の性ありて
不知露與霜 知らず 露と霜とを

05 幽人重其德 幽人 其の德を重んじ
徙植臨前堂 徙し植えて前堂に臨ましむ

11 去來雙鴻鵠 去來す 雙鴻鵠

棲息兩鴛鴦 棲息す 兩鴛鴦

榮蔭誠不厚 榮蔭 誠に厚からず

斤斧亦勿傷 斤斧も亦た傷なう勿し

〈「古意」其五〉

青々と茂る桂樹は秋になつて花開く。⁽¹⁵⁾ そしてその桂樹は「歲寒性」⁽¹⁶⁾を持つものであつて、「幽人」はそれを重んじて庭に移し植えるのである。この樹を移し植えるというイメージは『莊子』逍遙遊の「惠子謂莊子曰、吾有大樹、人謂之樗。其大本擁腫而不中繩墨。其小枝卷曲而不中規矩。立之塗、匠者不顧。……（莊子曰）今子有大樹、患其無用。何不樹之於無何有之鄉・廣莫之野、彷徨乎無爲其側、逍遙乎寢臥其下。不夭斤斧、物無害者。無所可用、安所困苦哉（惠子莊子に謂いて曰く、吾に大樹有り、人之を樗と謂う。其の大本は擁腫して繩墨に中らず。其の小枝は卷曲して規

矩に中わず。之を塗に立つるも、匠者顧りみず。……（莊子曰く）今子に大樹有りて、其の無用を患う。何ぞ之を無何有の郷・廣莫の野に樹え、彷徨乎として其の側に無爲にし、逍遙乎として其の下に寢臥せざる。斤斧に天せられず、物も害する者無し。用うべき所無きも、安ぞ困苦する所あらんやと」に基づくものである。

これに依れば「樗」はもともと「無用」のものであるのだが、「無何有之郷・廣莫之野」に移し植えられることによって、斤斧から完全に脱することが可能となるのである。其五の「桂樹」も「歲寒性」という有徳たるものであると同時に、「榮蔭誠不厚」と詠われる様に、「無用」なものである。だからこそ語り手である「幽人」は「桂樹」を前堂に移し植え、「斤斧亦勿傷」と述べるのであつて、「無用」であつた「桂樹」は、「幽人」によつて移し替えられることによつて、「樗」や其四の「松」の境涯に至るのである。其二では「山上草」という社会から元来切り離された所にある自己の（理想としての）脱俗を示し、其三では「賣龜」が「有用」であるが故に殺され、其四に於いては「松」の時間・空間的な社会との断絶を詠う。其五では「無用」な「桂樹」が「幽人」の手によつて移し植えられ、斤斧からの完全な脱却が提示されていた。其二から其五まで一貫

するテーマは「有用」たるものが切斷されるということであつたが、このイメージは一体何に起因するのであろうか。先に述べた様に、本詩には意図せず離職を迫られる境遇に対する感懐が底流している。そのような感懐を示さんとしたとき、彼は詩作の中で「有用」が斷たれて社会へと組み込まれていくことを其二以降連続して用い、「幽人」に仮託してそのようなイメージと対峙していく。自己が有用であるが故に社会に組み込まれていたのだという、いわば自負としての「有用」が其二以下の詩作によつて獲得され、その結果として自己がより明確化されていくのである。

以上のように其五までは、大部分が『莊子』を典故としながら、語り手の仮託としての「幽人」を媒介として展開していた。そのように詠じられた「古意」の詩的世界は其六に於いてどのように集約するののか。

三

王績が大業中に職を辞したことは先に述べた通りである。王績と莫逆の契りを交わしたという呂才はその際のことを以下のように述べる。

時天下亂、藩部法嚴、屢被勸効。君歎曰、羅網高懸、去

將安所。遂出所受俸錢、積于縣城門前、託以風疾、輕舟夜遁^{①7}（時に天下亂れ、藩部法嚴しく、屢しば勸効せらる。君歎きて曰く、羅網高く懸かる、去らんとて將た安この所ぞと。遂に受くる所の俸錢を出だし、縣城の門前に積み、託するに風疾を以てし、輕舟にて夜遁る）

王績が帰隱の際に発したとされる「羅網高懸、去將安所」という言葉は『後漢書』逸民傳の「（張）升曰、吾聞趙殺鳴犢、仲尼臨河而反。覆巢竭淵、龍・鳳逝而不至。…老父趨而過之、植其杖、太息言曰、吁、二大夫何泣之悲也。夫龍不隱鱗、鳳不藏羽。網羅高懸、去將安所（升曰く、吾聞くに趙の鳴犢を殺すや、仲尼は河に臨みて反る。巢を覆し淵を竭くせば、龍・鳳は逝つて至らずと。…老父趨りて之を過ぎ、其の杖を植て、太息して言いて曰く、吁、二大夫何ぞ泣くことの悲しきや。夫れ龍は鱗を隠さず、鳳は羽を藏さず。羅網高く懸^かかる、去らんとて將た安^{いず}この所ぞ）」によつた言葉である。『後漢書』によれば、龍や鳳は己の才を隠すことがないため、天に掛かつた網羅から逃れることができないのである。王績がこれによつて「羅網高懸、去將安所」と述べるということは、天下の乱れによつて離職せねばならぬ境遇に於いては、どこにも逃れることがで

きないという、社会に対する閉塞感が確かに存在していた
ということである。其六では飛翔する「鳳」と、閉塞感を
もたらす「羅」が詠出されている。

彩鳳欲將歸

彩鳳 將に歸らんと欲し

提羅出郊訪

羅を提げて 郊を出でて訪^とう

羅張大澤已

羅大澤に張りて己み

鳳入重雲颺

鳳重雲に入りて颺^{あが}る

05 朝棲崑閬木

朝に崑閬の木に棲み

夕飲蓬壺漲

夕に蓬壺の漲に飲む

問鳳那遠飛

鳳に問う那ぞ遠く飛ばんや

賢君坐相望

賢君 坐して相い望むと

鳳言何深德

鳳言う 何ぞ深徳あらん

10 微禽安足尚

微禽 安んぞ尚ぶに足らんや

但使雛卵全

但だ 雛卵をして全からしめ

無令嬋繳放

嬋繳をして放たしむること無かれと

皇臣力牧舉

皇臣 力牧舉げ

帝樂簫韶暢

帝樂 簫韶暢^{いた}る

15 自有來巢時

自ずから有り來巢の時

明年阿閣上

明年 阿閣の上

へ「古意」其六

其六に於ける「鳳」も、「竹」や「松」のように社会によつて捕らえられんとする存在として詠出される。飛翔せんとするものを「羅」が妨げるといふ表現は魏晋期、特に嵇康の詩中に多く詠じられており、ここにもやはり嵇康のイメージが反映されているのである。しかし、「古意」其六に於いて「鳳」は、「羅」に捕らわれることなく高く飛翔していく。つまり「羅網高懸、去將安所」といふ現実の社会に対する閉塞感を、詩作という行為によつて突破しているのである。その意味に於いて「鳳」は、「有用」「無心」を超えた、其二の「山上草」や其四の「松」と同等の次元に存在しているのではあるが、その上で「皇臣力牧舉、帝樂簫韶暢」と、治世が行われたのであれば「自有來巢時、明年阿閣上」と朝廷に戻るとしている。この一見矛盾するかに見える態度こそ、「古意」六首という連作の詩作によつて獲得された視座である。

「古意」六首には、「有用」なるものが断たれるというところが繰り返し詠じられていた。それは社会の乱れによつて隠遁せざるを得ない状況に対する感懐が起因となつていることは先に述べた通りである。そしてその感懐を連作として詠ずることによつて、自己が「有用」であるために社会

に組み込まれていたのだという、自負としての「有用」が確認されていく。だがその自負は現実次元の社会の大乱によつて常に打ち碎かれる。その時に王績は詩文の中で、自慰としての「山上草」という、完全に社会と切り離された意境を設定するのである。がしかし、結局詩作による自慰では満たされない現実的な問題があつた。その満たされない仕官の望みの生々しさ——現実とのぶつかりかたのきわどさ——が其六の「鳳」に託されて示されていたのである。そしてそれは、「山上草」という境地ではなく、かといつて社会に入り込むでもない。身は隱逸者としてありながらも、社会への関心が棄てきれない、そのような対社会的視座を持つ自己が詩作行為の中で明確化されていくのである。

結

其一は自己と嵇康とを重ねあわせて詠出し、其二に於いては「無心復招疾」と嵇康の生き方すら否定的に捉えていた。また其六に於いても飛翔と「羅」という嵇康を想起させる表現が用いられていることも指摘した。以上の点から、「古意」の「古」の視座が嵇康に向いていることが明らかとなった。社会の趨勢に巻き込まれ離職せねばならぬ——

現実からはじかれた——境遇にあつて、王績はその感懷の解決を詩作の中に求めた。その中でも特に拠り所としたのは「古」の嵇康の対社会的な態度であつた。ただ、王績の「古意」詩は、「擬古」詩のように古の視点を獲得、あるいは対峙するに留まるのではなく、「古」の嵇康の生き方をすら「無心復招疾」として否定的に捉え、その先の次元、すなわち「山上草」というあらかじめ孤絶した境涯を設定する。がしかし、その一方には現実的問題として、王氏一族たる自己の、仕官に対する矜持が存在していた。「古意」詩に於いて「有用」なものが社会へと組み込まれていくことが其二以後連続して用いられているのは、自己が社会的に「有用」であるという自負を獲得していく過程であつた。そのような自負によつて明確化されていく自己は其六に於いて「羅」に捕らわれることのない「鳳」として詠出されていた。

その「鳳」は、「山上草」という境地に埋没するのではなく、「有用」として社会に入り込むでもない。社会と断絶した次元にありながらも、社会への関心が棄てきれないのである。それは其三の「寶龜」の様に、悲劇的な結末に至ることを知りながらも、社会への積極的な関わり——自負としての「有用」に裏付けされた対社会的視座——に

執着している、ということである。そのような自己こそが「古意」六首という連作によって獲得されていくものであった。

注

- (1) 『唐詩』(中国古典文学基本知識叢書、上海古籍出版社、一九七九)
- (2) 『答馮子華處士書』。なお本論文中に引用する王績詩文については、韓理洲校點『王無功文集 五卷本會校』(上海古籍出版社、一九八七)を底本とした。
- (3) 『晩年紆志示翟處士正師』
- (4) 王績について高木重俊氏は「寒郷の春——王績の文学」(『人文論究』第五十号、一九九〇)中で、「隱者王績の胸中には、繁華への未練と、それに関わり得ない不遇の思いがひっそりと横たわっていた」と述べ、また「太平の世に疎外され隱士たらざるを得ない現実に対しては、屈折した思いがあったであろう」とする。本稿の目指す所は、そのような視座が詩作によってどのように確認され、また連作という行為によって如何にして自己が深化され、獲得されていくのかという点を明らかにすることである。
- (5) 六朝期の「古意」詩について言及した論文は住吉孝之「六朝期における「古意」詩の成立と變容」(『中国文学研

究』32、二〇〇六)があり、唐代の「古意」詩については中野将・吉原英夫「古意詩」について、その特色と文学史的位置」(『東京工業高等専門学校研究報告書』20、一九八八)に言及がある。

- (6) 今場正美「王績「古意」六首について」(『学林』第十二號、一九八八。後に『隱逸と文学』(中国芸文研究会、二〇〇三)に所収)

- (7) 『易経』履に「九二、履道坦坦、幽人貞吉。象曰、幽人貞吉、中不自亂也(九二、道を履むこと坦坦たり、幽人なれば貞にして吉。象に曰く、幽人なれば貞にして吉とは、中にして自ら亂れざればなり)」とある。

- (8) 陶淵明「命子」には「紛紛戰國、漠漠衰周。鳳隱於林、幽人在丘(紛紛たる戰國、漠漠たる衰周。鳳は林に隠れ、幽人は丘に在り)」とあり、天下が荒廃し道無き時には「鳳」は林深くに隠れて現れず、「幽人」も山林へと隱遁するとする。この「幽人」は、『論語』泰伯の「天下有道則見無道則隱(天下に道有れば則ち見れ、道無ければ則ち隠る)」という儒教的規範にのっとったものである。なお、王績「古意」六首中にも其一で「幽人」、其六で「鳳」が対応して詠出されている。

- (9) 『世說新語』雅量篇に「嵇中散臨刑東市、神氣不變。索琴彈之、奏廣陵散。曲終曰、袁孝尼嘗請學此散。吾靳固未與。廣陵散於今絕矣(嵇中散刑に東市に臨み、神氣變ぜず。琴を求めて之を弾き、廣陵散を奏す。曲終りて曰く、袁孝

尼嘗て此の散を學ばんと請う。吾新固して未だ與えず。廣陵散今に於いて絶えんと」とある。

- (10)『太平御覽』卷五百七十九の引く呉均『續齊諧記』に「女子曰、子識此聲否。彦伯曰、所未曾聞。女曰、此曲所謂楚明光者也。唯替叔夜能為此聲（女子曰く、子此の聲を識るや否やと。彦伯曰く、未だ曾て聞かざる所なりと。女曰く、此の曲所謂楚明光なり。唯だ替叔夜能く此の聲を為す）」とある。

- (11)『新唐書』隱逸傳「大業中、舉孝悌廉潔、授祕書省正字。不樂在朝、求為六合丞、以嗜酒不任事、時天下亦亂、因劾、遂解去（大業中、孝悌廉潔に舉げられ、祕書省正字を授かる。朝に在るを樂まずして、求めて六合丞と為り、以て酒を嗜みて任事せず、時に天下亦た亂れ、劾に因りて、遂に解きて去る）」

- (12)『莊子』外物に「君曰、漁何得。對曰、且之網得白龜焉。其圓五尺。君曰、獻若之龜。龜至。君再欲殺之。再欲活之。心疑卜之曰、殺龜以卜吉。乃剖龜。七十二鑽而無遺筴。（余且之）（君曰く、漁して何をか得たると。對えて曰く、且之の網白龜を得たり。其の圓五尺と。君曰く、若の龜を獻ぜよと。龜至る。君再び之を殺さんと欲し、再び之を活かさんと欲す。心に疑いて之を卜して曰く、龜を殺して以て卜すれば吉なりと。乃ち龜を剖り、七十二鑽にして遺筴無し）」とある。「古意」其三はこれに基づく。

- (13)『莊子』知北遊に「言未卒、齧歛睡寐。被衣大悅、行歌

而去之曰、形若槁骸、心若死灰。真其實知、不以故自持。媒媒晦晦、無心而不可與謀。彼何人哉（言未だ卒らざるに、齧歛睡寐す。被衣大いに悦び、行歌して之を去りて曰く、形は槁骸の若く、心は死灰の若し。其の實知を真にして、故を以て自ら持せず。媒媒晦晦、無心にして與に謀るべからず。彼何人やと）」とある。

- (14)「匠石顧」は『莊子』人間世に「匠石之齊、至於曲轅、見櫟社樹。……觀者如市。匠伯不顧、遂行不輟。弟子厭觀之、走及匠石曰、自吾執斧斤以隨夫子、未嘗見材如此其美也。先生不肯視、行不輟、何邪。曰、已矣。勿言之矣。散木也。以爲舟則沉、以爲棺槨則速腐、以爲器則速毀、以爲門戶則液腐、以爲柱則蠹。是不材之木也、無所可用、故能若是之壽（匠石齊に之き、曲轅に至り、櫟社の樹を見る。……觀る者市の如し。匠伯顧みず、遂に行きて輟めず。弟子之之を厭觀し、走りて匠石に及びて曰く、吾れ斧斤を執りて以て夫子に隨いしより、未だ嘗て材の此の如く其の美なるを見ざるなり。先生肯えて視ず、行きて輟めず、何ぞやと。曰く、已めよ。之を言うこと勿かれ。散木なり。以て舟を爲れば則ち沉み、以て棺槨を爲れば則ち速やかに腐り、以て器を爲れば則ち速やかに毀れ、以て門戶を爲れば則ち液腐し、以て柱を爲れば則ち蠹あり。是れ不材の木なり、用うべき所無し、故に能く是の若く之れ壽なりと）」とあるのに基づくものである。

- (15) 其五の第三句「自言歲寒性」は三卷本によったものであ

避けようとする志向と常にうらはらであり、網羅のイメージには人間の悪意への深刻な恐れが籠められているようである。高翔する精神と、それを遮ろうとする網羅—この發想上の二重構造は、替康の詩においてしばしば指摘することができ」（二〇四頁）とする。

（筑波大学大学院）

り、底本とした五卷本では「自然歲寒性」に作る。其四では「松」について「自言生得地」とあり、其六では「鳳言何深德」とあるように、「古意」六首に於いては「斤斧」から逃れた存在が自ら語るということが一貫している。また、王績には「春桂問答」と題された詩が存在し、語り手と桂樹との対話が詠われていることから、ここでは三卷本の「自言歲寒性」に従った。なお、三卷本と五卷本との関係については張錫厚「關於《王績集》的流傳與五卷本的發現」（《中國古典文學論叢》人民文學出版社、一九八四）に詳しい。

（16）『論語』子罕に「子曰、歲寒、然後知松柏之後彫也（子曰く、歲寒くして、然る後に松柏の彫むに後ることを知る）」とある。

（17）呂才「東臯子集序」。なお、『新唐書』隱逸傳では「歎曰」以下を「網羅在天、吾且安之」（網羅天に在り、吾且く安にか之かん）」に作る。

（18）替康詩中に見える飛翔と網羅については、興膳宏「替康の飛翔」（『中國文學報』一六、一九六二。後に『乱世を生きた詩人たち—六朝詩人論—』研文出版、二〇〇一に所収）に詳細な論究がある。興膳氏はその中で「五言贈秀才詩」の「雲網塞四區、高羅正參差。奮迅勢不便、六翮無所施。隱姿就長纓、卒爲時所羈。單雄翩獨逝、哀吟傷生離（傍線部筆者補う。以下同じ）」、ならびに「述志詩二首其一」の「焦鵬振六翮、羅者安所羈。浮遊太清中、更求新相知。比翼翔雲漢、飲露餐瓊枝」等の詩を取り上げ、「隻鸞の飛翔にみられる區外に遊ぼうとする志向は、人間の悪意から逃